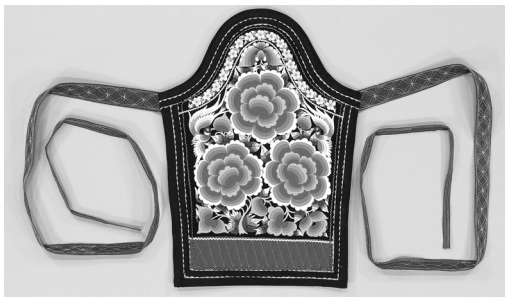
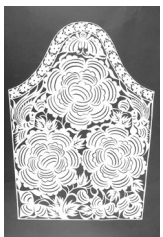


国立民族学博物館の収蔵品⑮

熟女たちがリードするファッション



小型の木魚を持ち、着飾って蓮池会の活動に参加する女性たち。
2012年2月5日、横山廣子撮影



美しく刺繍された幼児をおんぶするための背負い布（右）と切り紙細工でつくられた型紙（左）。いずれも展示中

以前は少女の頃から民族衣装を着始め、年頃になると、民族衣装の限られた枠内でも、個性的なおしゃれを楽しむ娘たちもいた。しかし、いまや若年層が民族衣装を着るのは婚礼時くらいになってしまった。

それは民族衣装に関する美的感覚を鍛える機会を減少させるとともに、手仕事の衰退をも招いている。女性たちは幼い頃から針を手にし、切り紙細工の型紙を置いた上から布に針を刺し、美しい文様と配色の刺繍の腕を磨いてきた。このセンスと技能は、蓮池会の熟女たちの間では依然として健在だが、今後はどうなるのか、見守ってきたい。

（横山廣子）

中国展示場では、装いの展示を通して中国の民族的多様性を表現している。装飾や配色の美しい女性用民族衣装は、ほとんどが若い女性用だが、ペー（白）族の場合、年配女性が宗教活動時に着用する晴れ着が展示されている。現在、華麗さを競ってペー族の民族衣装のファッションをリードするのが、まさに彼女ら、熟女たちだからである。

私が三十年あまり調査を続けてきたペー族は、中国雲南省西北部の大麗盆地に住んでいる。そこに唐代には南詔、宋代には大理という中国西南部の王国の都があった。ペー族は王国内の上層や支配層を占め、多数の非漢民族で構成される中国西南部において、政治的・経済的に優位な位置を占めてきた。王国が出現した唐代前後から、中国の漢民族の文化をはじめとする優れた外来文化を受容し、ペー族特有の文化を発展させてきた。その一つが仏教文化である。

南詔王が仏教を手厚く保護し、多数の寺院や仏塔を建立して以来、仏教は大麗地域に浸透していった。十四世紀初め頃の大理の状況を記す『雲南志略』には、貧富の差なく、どの家にも仏壇があり、夕刻に

は古いも若きも数珠を手にして仏壇に向かう様子が描かれている。十四世紀末の大理には、十数名の日本人僧が住んでいたとされる。そのうち当地で亡くなった四人の僧のために建てられた仏塔は「日本四僧塔」として知られ、今も残っている。

そういう土地柄ゆえか、現在、大麗盆地の農村では、年配者が参加する仏教の集団組織が各地に見られる。とりわけ会員が多いのが、女性組織の「蓮池会」である。村の女性たちは、孫が生まれる年代になると、多くが蓮池会に入会する。四十代後半での入会もある。

蓮池会の熟女たちは、釈迦や観音などの祭日になると、盛装して村の寺廟に集まり、読経し、儀礼をおこない、その場で調理をして会食を楽しむ。祭日は月に一、二度と多く、数日間続くこともある。彼女らは後ろ丈の方が長い上衣、ズボン、ベスト、前掛け、飾り帯、頭飾りを身につけ、その上から必ず大玉の数珠と美しく刺繍された肩掛け袋をさげる。その装いは濃紺を基調としていて、落ち着いた印象もあるが、細部を見れば、頭飾りの布の蝶の模様がすべて光るビーズで縁取られていたり、身につけたベストにスパンコールが散りばめられていたりする。年々、新たな工夫が見られ、しかも時に新しいおしゃれが、熟女たちの間に流行の旋風を起こすこともある。